

である“ideas in action”を文字通り表現するものとしてこれを彼の詩論の中にとり入れた。そして、この理論によって『詩経』を英訳したというのである。

静女其妹
俟我於城隅

Lady of azure thought, supple and tall,
I wait by nook, by angle in the wall.

Quiet girl how charming
Dated me at wall's corner.

上の英訳は Pound, 下は Dembo によるものである。静にあたる部分を“of azure thought”に訳してえられる具体的感覚と lyricism のほかに、ここで Pound は、漢字のいわゆる「映画の性質」を訳し出そうとしているのだと Dembo はいうのである。つまり、「観念またはイメージの複合体が二つできるように一行が二分され、その一行の二つの部分が、英語において可能なかぎり、それぞれ一つの漢字に似せられ、一つの詩が、このような漢字の流れのように、見えるように」訳されているという。たとえば“Lady of azure thought”が一つの漢字に、“supple and tall”が別の漢字に、“I wait by nook”がまた別の漢字にといった風に……。このように Pound のほん訳は、原詩の語義に忠実というよりはむしろ、原詩に用いられた漢字のもつ絵画性を、そのリズム、韻、叙情性を、忠実かつ巧みに英語に訳し出すのである。

Dembo は、これに「風」「雅」「頌」に関する研究をふしているが、がいして Pound が西洋の読者に、中国詩の詩的、「黙示録的」ほん訳を与えたこと、またそのことにより、西洋の詩に新しい生命を吹きこんだことの業績を、Dembo は高く評価するのである。

外国人の目からみた洞察力ある研究にわれわれは感

× × × × ×

O'Neill. By Arthur and Barbara Gelb. New York: Harper & Brothers, 1962.

木村俊夫

O'Neillの死後およそ10年、その晩年には「生き埋め」と評した人もあるほど、一般世間は彼を軽視したが、逆に死後における、特に1956年以後における、彼への興味の復活はめざましい。此所に Gelb 夫妻の O'Neill 伝をとりあげる前にその間に発表された彼の研究資料をそのめばしいものだけでもあげておこう。

まず O'Neill 自身のものとしては *Long Day's*

服する。と同時に、その限界を感じずにはいられない。「静女」を Dembo は“quiet girl”と訳しているが、現代日本の中国文学研究においては、「静」が「しずかな」ではなく、「しとやかな」(『詳解漢和大字典』)、「しっとりとした」(吉川幸次郎『詩経国風』)を意味することは、常識の感がある。また Dembo の論点の一部は「E. パウンド『詩経』英訳」(『中国文学報』1955年10月号)において、Burton Watson がすでに発表したものでもある。Dembo は、日本の中国文学研究をほとんど参照していない。そこに、外国人の中国、日本文学研究の限界があるようだ。

同じことは、Lawrence W. Chisolm, *Fenollosa: The Far East and American Culture* (New Haven, 1963) についてもいえる。労作ではあるが、Fenollosa と Pound の能のほん訳を詳述しながら、能の英訳の下訳をした平田の名前がでてこない。矢野峰人博士のよく知られた研究、「フェノロサと平田秀木」(『英文学夜話』研究社、1958)およびその後の研究を参照しなかったためであろう。同じようなことは、前述の Sutton 編 *Ezra Pound* についてもいえよう。その論文集中に東洋人の研究が一つくらい採録されてもおかしくない。最も端的にあらわれているのは、Donald Gallup, *A Bibliography of Ezra Pound* (London: Rupert Hart-Davis, 1963) である。Pound の著作、ほん訳の龐大な bibliography であるが、日本に関する entry はまことに不完全なのである。

例外はあるだろう。しかし、一般的にいうと、日本における東洋文学、そしてアメリカ文学のすぐれた研究成果が外国であまり活用されないのは、いかにも残念である。それは、すぐれた研究がないからではなく、知られないからではなからうか。識者の御意見をうけたまわりたいと思う。(同志社女子大学助教授)

Journey Into Night (1956), *A Touch of the Poet* (1957), *Hughie* (1959), *More Stately Mansions* (1963) [以上いずれも Yale University Press, New Haven], それに昔彼が脚色した S. T. Coleridge, *The Rime of the Ancient Mariner* の text が Donald Gallup によって発表されている (*The Yale University Library Gazette*, October, 1960, vol. 35. No. 2)

書誌の整備も行われている。

Oscar Cargill, N. Bryllion Fagin & William Fisher ed., *O'Neill and His Plays* (New York University Press, New York, 1961) にかなりくわしい書誌が収められたが、Jackson R. Bryen, “Forty Years of O'Neill

Criticism" (*Modern Drama*, September, 1961) は尚くわしく、又 Jordan Y. Miller, *Eugene O'Neill and the American Critic: A Summary and Bibliographical Checklist* (The Shoe String Press, 1962) は更に整備した形で書誌を提供している。

評論のたぐいでは、書物だけでも上述の Cargill 等編のものの他に、

Michel Zeraffa, *O'Neill* (L'Arche éditeur, "Les Grands Dramaturges," Paris, 1956)

Doris V. Falk, *Eugene O'Neill and the Tragic Tension* (Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 1958)

Clifford Leech, *O'Neill* (Oliver and Boyd, "Writers and Critics series," Edinburgh and London, 1963) があり、単論文ともなれば *Modern Drama* (September, 1961) の O'Neill 特集号掲載のものをはじめずい分の数算える^{註)}。

併し一番にぎやかな景観を呈しているのは伝記である。即ち

Agnes Boulton, *Part of a Long Story,, Eugene O'Neill as a Young Man in Love* (Doubleday & Co. Inc., Garden City, N. Y., 1958)

Croswell Bowen, *The Curse of the Misbegotten (With the assistance of Shane O'Neill)* (McGraw Hill Book Co., N. Y., 1959)

Doris Alexander, *The Tempering of Eugene O'Neill* (Harcourt Brace & World Inc., N. Y., 1962) それに最近の Gelb 夫妻のものとなる。序でに云えば、Max Wylie, *Trouble in the Flesh* (Doubleday & Co. Inc., Garden City, N. Y., 1959) はまぎれもなく O'Neill を model にした小説である。

さて Gelb 夫妻のこの書は割期的な意味を持っている。Arthr Gelb は *The New York Times* の staff であるが、本書の style は正しく O'Neill に非常な愛着を持つ練達の新聞記者のそれである。上述 Doris Alexander の業績が10年間の research の結晶であり、Croswell Bowen の力作には Shane O'Neill の助力があったが、6年の準備を経て成った本書の一番の助力者は Carlotta Monterey (Mrs. Eugene O'Neill) である。この Carlotta を中心に、巻頭の acknowledgment の示す如く、夫妻が本書の資料を集めるために、6年間にわたって会見した人物、点検した資料の数は尨大である。中でも驚くべき根気と足とで集めた O'Neill とかわりのあった人物よりの聞き書きは貴重である。もし著者のこの努力がこの時期になかったならば、その

多くは活字になる機会もなく、これ等の人々と共にやがて地下に埋もれてしまう事になったであろう。

本文およそ 950 頁の本書の各所に盛りこまれた事実の報告と information の集積は書斎の学究には全く不可能な仕事である。小さな episode (例えば昨年京都を訪れた Donald Oenslager 教授と雑談の折話題になった事であるが、氏が若い頃 *Desire Under the Elms* に端役で出演した事も記録してある) の数々をふくめて、O'Neill の父 James の事から説き起して、O'Neill の臨終、埋葬に至るまでの O'Neill 一生の各段階がきわめて緻密に跡づけられる。Gelb 夫妻は新しいタイプの Boswell であり、この書は正に O'Neill に関する information の宝庫である。O'Neill と映画との関係は、O'Neill と Oona, Chaplin との関係は、O'Neill と Agnes Boulton, Carlotta との関係は、若い頃彼は Rippin 家で如何に過したのか、彼の病状は、等々、様々の質問を用意して本書をよめば、この書はその一々にかなりくわしく答えてくれる。

併し又、例えば Charles Gilpin と *The Emperor Jones* のかわりについては本書よりも Moss Hart, *Act. I* の方が更にくわしく伝えてくれる事を知る。O'Neill の母親の魔薬中毒に関係する説明は Alexander のものとは相異なる。O'Neill の読書がどの範囲にわたるか知りたく思っても、なるほど多くの作家、作品の名が点々とあげられてはいても、彼がそれ等を如何にうけとめたかについては充分語られていない。(Balzac, Stendhal, Don Byrne 等、これだけくわしい伝記であれば言及されてもよいと思うが、本書にはそれもない。) *The Emperor Jones* を O'Neill に書かせたものは、本書に書いてある程度の外面的な事柄だけでは充分の説明とはなるまい。この作品に限らず、本書の随所にある作品内容への言及は多く外的情況と作品のある部分の相似の指摘に止っている。O'Neill には東洋的なものへの関心、又仮面 (劇) への関心が強いが、それ等についても、本書は深く O'Neill の内部へえぐりこんで探求しない。此所にこの伝記の一番の限定がある。O'Neill の内部の核心に迫って行くと言うより、それをとりまく又その核と相反映し合う外的な事柄に記述の殆んどは費されいる。一人の人間に関する information の集積にはきりもない。又ある事柄に関して他人と異なる観察の出で来る事もやむを得ない、それ等はいずれも補訂する事が可能である。併し O'Neill の真実の核に迫って行くという仕事は、事実焦点をあてている本書のわくの中では果す事はできない。

以上いささか註文をつけたが、吾々はむしろ本書の与えてくれたような豊富な伝記資料を持ち得た事を喜ぶたい。5部に分れていて、1部は1846年(父 James の生年)から1912年まで、2部は1912年より1920年まで、3部は1920年より1926年まで、4部は1926年より1936年まで、5部は1936年より1953年までに区切って、この伝記は書かれているが、それぞれの部につけられた *Haunting Ghosts*, *The Birth of a Soul*, *The Making of a Poet*, *Wilderness Regained*, *Hopeless Hope* の subtitles は平板で、むしろなくもがなと思う。

本書の jacket ではこの書は O'Neill の “definitive biography” であると謳っているが、そんな事はない。この書は all about O'Neill を盛りこんではいない。これとは異った approach で O'Neill の伝記は更に書かれる必要がある。しかも本書は貴重である。この

× × × × × ×

The American Vision: Actual and Ideal Society in Nineteenth-Century Fiction. By A. N. Kaul. New Haven: Yale Univ., 1963.

那 須 頼 雅

本書は、アメリカ小説のひとつの顕著な性格を指摘した、極めて野心的な労作であるといえよう。19世紀アメリカの代表的小説家 James Fenimore Cooper, Nathaniel Hawthorne, Herman Melville, Mark Twain をとりあげて、小説と社会との相関関係という面から、その性格を探ろうとする試みである。

ある小説家が、一見してその時代、社会から遠ざかり、超越しているようにみえても、やはりこの小説家は、その時代と社会の産物であることは言うまでもない。ただ、その表現が極めて象徴的であったり、あるいは、夢想的、幻想的になりすぎていたりして、その小説家と社会との相関関係を見失いがちであるだけである。この著者は、そういった観点から、当時のアメリカ小説を観察する。アメリカには、西ヨーロッパの文明世界から、いきなり原始的大陸へ移されたという、真にアメリカ的経験がある。この経験は当然にして、小説の中に同じくらい真にアメリカ的な theme と pattern を織込まずにはいられない。そして、この真にアメリカ的経験が生みだした、新しい型の小説はその特質として、現実社会への批判と理想社会への執心の二つをあわせもつと主張する。つまり、これらアメリカ19世紀小説家達は、現実社会を極めて深刻に表現

貴重な O'Neill 伝記を研究者はしばしば参照せねばならない。更にたくましい努力で本書の補訂がなされる事を期待しよう。と同時に異った新しい伝記の出現をも期待したい。その兆しはすでにある。Doris Alexander はその伝記の続篇をやがて発表するであろうし、John Henry Raleigh も一つの O'Neill 伝を脱稿したという。尚又 Lou Scheaffer は数年前から、その O'Neill 伝を着々準備中であるとも聞く。併し又こうした伝記が出揃った後にも、独自の方法で綿密に事実を跡づけた本書はその存在意義を少しも減じはしないであろう。

註) 古い Richard D. Skinner, *Eugene O'Neill, A Poet's Quest* や Sophus Keith Winther, *Eugene O'Neill, A Critical Study* (revised and enlarged edition) も reprint で入手できる (Russell & Russell, Inc., N. Y.). (同志社大学文学部教授)

する面と、同時に、だからといってその現実社会の枠に閉じこめられないで、たえず理想社会を念頭におく面との両面をもっていたというのである。

この新しい小説の theme と pattern を探る方法として、この著者は、同時代の英国小説家との比較をこころみる。Dickens, Disraeli, Kingsley 等の英国作家は、意図的にみて明白な reformist であったのに対して、それらアメリカの諸作家は殆んどそういった面をもたない。たとえば Dickens の *Oliver Twist* には明らかに社会制度改良を迫るものが読みとられるが、Mark Twain の *Huckleberry Finn* には、社会を超越する基本的人間倫理にふれるもののみがあって、奴隷制度の是非に関わるものが見当たらないと説明する。その理由として、この著者は、これらアメリカ小説家に一つの根強い myth 信仰を見出している。つまり、個人は尚も自由行為者であること、社会は仮借ない暴力により作家の imagination を圧迫しないこと、それゆえに現存社会を改良せねばならない必要性が薄いこと、これらをかれら作家は固く信じて疑わなかった。この意味から、かれらには reformist の資格が欠除しており、単なる visionary にすぎなかったということをあげている。

さて、この reformist としての意図が見当たらないという面から、この著者は論を進めて、当時のアメリカ小説の他のいくつかの特質を導きだしている。たとえば、‘optimist’ とか、‘pessimist’ とかのレッテルは、英国の同時代作家の場合と異なり、かれらにはそぐわないものであるとか、又、英国の同時代の小説と較べて、アメリカ小説には pathos の効果を目指すものが